

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12974

研究課題名（和文）テクノロジー的全体主義の分析：アーレントとヨナスの思想比較を通じて

研究課題名（英文）Analysis of Technological Totalitarianism through Arendt's and Jonas' theories

研究代表者

百木 漠（Baku, Momoki）

関西大学・法学部・准教授

研究者番号：10793581

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：戸谷洋志との共著『漂泊のアーレント、戦場のヨナス』（2020）を上梓した。アーレントとヨナスの生涯と思想を比較したうえで、最終的に両者のテクノロジー論を参照し、21世紀における全体主義として「テクノロジー的全体主義」という概念を提唱した。また単著『嘘と政治』（2021）では、ポスト真実をめぐる政治現象（ポピュリズム、フェイクニュースなど）をアーレントの「政治における嘘」論から考察した。「人工知能と言語化不可能なもの」（2020）、「スマホとデジタル全体主義」（2021）、「新自由主義的な言語観に抗う」（2022）などの論文でも、今日のSNSやデジタル技術の発展が政治に与える影響を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

デジタル技術の進展がその利便性と同時に我々から自由（意志）を奪っているのではないかという危惧はすでに様々な論者によって示されている。しかしこのテーマの先行研究はテクノロジーの専門家やジャーナリストによるものが多く、政治思想や政治理論の観点から、どのような点においてデジタル全体主義が新しく、どのような点に危険性があるのかについての考察は十分なされてこなかった。本研究では、権力論や支配形態の観点から今日のデジタル統治の特徴を考察し、過去の権力形態との差異を明らかにしてきた。今後到来しうるデジタル全体主義についての理論的基盤を提供した点に学術的・社会的意義があると考えている。

研究成果の概要（英文）：I collaborated with Hiroshi Toya on the publication of "Arendt in Exile, Jonas at Battlefield" (2020). In this work, we compared the lives and philosophies of Arendt and Jonas, ultimately proposing the concept of "technological totalitarianism" as a form of authoritarianism in the 21st century, referencing their theories on technology. In my book "Lies and Politics" (2021), I examined political phenomena surrounding post-truth, such as populism and fake news, through Arendt's theory of 'lying in politics'. Additionally, in my articles such as "Artificial Intelligence and the Ineffable" (2020), "Smartphones and Digital Totalitarianism" (2021), and "Resisting the Neoliberal Discourse on Language" (2022), I analyzed the impact of today's social media and digital technologies on politics.

研究分野：政治思想史

キーワード：ハンナ・アーレント ハンス・ヨナス デジタル全体主義 テクノロジー ポスト真実

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究に応募した 2018 年当時、ヨナス研究者の戸谷洋志とともに『漂泊のアーレント 戦場のヨナス』を執筆中であり、ナチズムの恐怖を経験した二人の思想家アーレントとヨナスが、それぞれどのように全体主義の本質を取り出し、それに対抗する思想を構築したかを比較考察する共同研究を行っていた。この共同研究を進めるなかで、両者が戦後ともに科学技術の発展に強い危惧を抱いていたことに気づき、21 世紀に全体主義が再来するとすれば、それは「テクノロジー的全体主義」とでも呼びうるような形態を取るのではないか、という予測を立てるに至った。同時にこの時期、アーレントの「政治における嘘」論を参照して、ポスト・トゥルース現象を思想的に考察する研究も開始しており、デジタル・テクノロジーの発展が現代政治にどのような影響を与えるか、それにどう対抗すべきか、という課題も研究したいと考えていた。こうした問題関心を精緻に言語化・理論化することを目標として研究を開始した。

2. 研究の目的

アーレントやヨナスの全体主義論および科学技術論を参照しつつ、21 世紀に全体主義が再来するとすれば、それは「テクノロジー的全体主義」とでも言うべき形態を取るのではないか、という仮説を検証し、その内容を言語化・理論化することが本研究の目的であった。20 世紀の全体主義がナチズムやスターリニズムなどの国家主義的な独裁体制という形態を取ったのに対し、21 世紀の全体主義はビッグデータとアルゴリズムを両輪としたテクノロジー中心の形態を取るのではないか、というのが研究当初からの仮説である。あわせて、ポスト・トゥルース現象など、インターネットやデジタル技術の発達が政治に及ぼす影響についても研究し、アーレントやヨナスの全体主義論や科学技術論がもつ現代的意義についても考察する。

3. 研究の方法

(1) アーレントとヨナスの全体主義論および科学技術論を精読し、デジタル・テクノロジーの発展が政治に及ぼす影響を考察するにあたり、活用できそうな部分を抽出する。その際、近年アクセス可能となった草稿群や最新の先行研究なども活用する。ヨナス思想の理解についてはヨナス研究者である戸谷洋志の協力を仰ぐ。

(2) 加えて、デジタル・テクノロジーが現代政治に与える影響に関する研究を広く収集し、(1) で抽出した理論を応用して、これについての思想的・理論的考察を行う。

(3) 以上を踏まえたうえで、「テクノロジー的全体主義」または「デジタル全体主義」という概念を提唱し、これについて思想的・理論的に考察する枠組みを構築する。

4. 研究成果

(1) 戸谷洋志との共著『漂泊のアーレント 戦場のヨナス』(慶應義塾大学出版会、2020 年)の出版。本書ではアーレントとヨナスの生涯と思想を比較しながら、ナチズムの恐怖を経験した二人の思想家が、それぞれどのように全体主義の本質を分析し、それに対抗する思想を編み出したか、という問いを探究した。その結論部において、21 世紀に全体主義が再来するとすれば、それは「テクノロジー的全体主義」という形態を取るのではないか、という仮説を提示した。またそれに対抗するためのキーワードとして「出生」の思想に着目した。この共著に関連して、第 45 回社会思想史学会の大会セッション「アーレントとヨナスの思想的交錯」を企画し、戸谷とともに共同発表および討議を行った。

(2) 単著『嘘と政治——ポスト真実とアーレント思想』(青土社、2021 年)の出版。本書では、2016 年のトランプ現象とともに話題になった「ポスト真実」という現象に着目し、アーレントの「政治における嘘」論を参照してこれを思想的に分析した。ポスト真実とは単に腐敗した政治家が嘘を撒き散らす現象を指すのではなく、政治的言説が嘘であるか真実であるかはどうでもよい、という開き直った態度が蔓延する現象を指すのであり、こうした傾向の広まりが全体主義の出現の一因になったというアーレントの議論を参照して、ポスト真実の危険性を考察した。これに関連して、『現代思想』2019 年 4 月増刊号「現代思想 43 のキーワード」に「ポスト・トゥルース」と題する論考への寄稿や、第 28 回政治思想学会(2021 年)での個人報告「始まりのための嘘：アーレント「政治における嘘」論再考」などを行った。

(3) 論文「スマホとデジタル全体主義」(『世界』946 号、2021 年)では、現代のデジタル技術の発展によって、我々のあらゆる行動がデータとして捕捉され、我々の将来の選択を先回りして最適な選択肢が提示されることになれば、人間の自発的な行動や思考の余地が縮減される危険性があることを示し、これを「デジタル全体主義」という観点から考察した。論文「新自由主義的な言語観に抗う」(『唯物論研究年誌』27 号、2022 年)では、デジタル技術の発展が人間の用

いる言語を変容させ、単なる情報伝達的手段へと狭隘化させてしまう可能性があることを指摘した。論文「人工知能と言語不可能なもの」(『現代思想』2020年9月号)では、アーレントのテクノロジー論を用いて人工知能開発が「黒魔術化」している現象を考察し、今日の人工知能が人間の理性・言語を超越したものを扱い始めているものではないか、という問いを考察した。

小論「アーレント VS シュミット コロナ時代の公共性を考える」(『朝日新聞』2020年5月)や小論「オンライン化で得たもの、失ったもの」(『季報唯物論研究』160号、2022年)では、コロナ禍において学会や研究会のオンライン化が進んだ結果、得たものと失ったものについて考察し、オンラインでのイベントには「あいだ」や「あと」の時間がないこと、つまり発表の間の休憩時間や隙間時間などに雑談したりする余白がないことがネガティブな側面ではないか、という見解を示した。

(4) 韓国で開催された「2023 INTERNATIONAL CONSORTIUM OF CRITICAL THEORY PROGRAMS CONFERENCE」(2023年6月)にて「Post-Truth and Populism」と題した英語研究報告を行った。ポスト真実的な政治現象をアーレントの「政治における嘘」論およびホックシールドの「ディープストーリー」論を参照して考察する内容であり、参加していた他国の研究者と有意義な意見交換を行うことができた。

(5) 論文「アーレントの活動論再考」(『立命館産業社会論集』第59号、2023年)では、アーレントの活動論に関する近年の研究動向をまとめつつ、アーレントが現代の科学者の試みを「自然の中への活動」と表現したことの意味を考察した。アーレントの「活動」には「他者との関わり」と「始まりをもたらすこと」という二つの軸があるが、現代の科学にみられるのは「他者との関わり」を欠いた「予測不能な始まりをもたらす」行為と解釈することが妥当であろうと結論づけた。関連する内容として、橋爪大輝『アーレントの哲学：複数の人間の生』への書評も執筆した(『社会思想史学会』第47号、2023年)。

(6) 当初の研究計画にはなかった成果であるが、アーレントとヨナスの思想比較研究からの副産物として、ケン・クリムスティーン『ハンナ・アーレント、三つの逃亡』(みすず書房、2023年)の翻訳や、小野寺拓也・田野大輔編『〈悪の凡庸さ〉を問い直す』(大月書店、2023年)への寄稿(第4章「〈悪の凡庸さ〉をめぐる誤解を解く」)なども行った。

研究全体を通して、アーレントとヨナスの全体主義論および科学技術論を応用して、現代のテクノロジーが政治・社会に及ぼす影響を思想的に考察するための理論的土台を築くことができた。今後も「デジタル全体主義」がもたらす危険性やそれへの対抗策について思想的・理論的な考察を続けていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 Baku Momoki | 4. 巻 45 |
| 2. 論文標題 Hannah Arendt 's Thoughts on Labor and Totalitarianism | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 KANSAI UNIVERSITY REVIEW of LAW and POLITICS | 6. 最初と最後の頁 17-28 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32286/0002001085 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 百木 漠 | 4. 巻 59 |
| 2. 論文標題 アーレントの活動論再考 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 立命館産業社会論集 | 6. 最初と最後の頁 91-108 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34382/00018702 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 百木 漠 | 4. 巻 132 |
| 2. 論文標題 経済学はなぜ市場を自然に喩えたがるのか : 新自由主義とアドルノの自然史 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『立命館大学人文科学研究所紀要』 | 6. 最初と最後の頁 303-328 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 百木 漠 | 4. 巻 27 |
| 2. 論文標題 新自由主義的な言語観に抗う : 人文的な言語の意義はどこにあるか | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『唯物論研究年誌』 | 6. 最初と最後の頁 95-116 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 百木 漠 | 4. 巻 160 |
| 2. 論文標題 オンライン化で得たもの、失ったもの | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 季報唯物論研究 | 6. 最初と最後の頁 62-67 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 百木 漠 | 4. 巻 946 |
| 2. 論文標題 スマホとデジタル全体主義 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 世界 | 6. 最初と最後の頁 128-137 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 百木 漠 | 4. 巻 64 |
| 2. 論文標題 斎藤幸平『人新世の「資本論」』から考える晩期マルクスの思想 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 唯物論と現代 | 6. 最初と最後の頁 87-99 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 百木 漠 | 4. 巻 71-4 |
| 2. 論文標題 抽象的人間労働の歴史的条件について | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 関西大学経済論集 | 6. 最初と最後の頁 277-297 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 百木 漠 | 4. 巻 3 |
| 2. 論文標題 「D. ヴィラによる闘技主義的アーレント解釈：アーレント活動論の非個人的次元」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『Zuspiel』 | 6. 最初と最後の頁 22-34 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 百木 漠 | 4. 巻 48(12) |
| 2. 論文標題 「人工知能と言語化不可能なもの」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『現代思想』 | 6. 最初と最後の頁 222-232 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 百木 漠 | 4. 巻 94 |
| 2. 論文標題 「エコ・マルクス主義に対するいくつかの疑問」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『唯物論』 | 6. 最初と最後の頁 65-83 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 百木 漠 | 4. 巻 47(6) |
| 2. 論文標題 ポスト・トゥルース | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 現代思想 | 6. 最初と最後の頁 100-105 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 百木 漠 | 4. 巻 147 |
| 2. 論文標題 アーレント、マルクス、ポピュリズム | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 季報唯物論研究 | 6. 最初と最後の頁 46-55 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 百木 漠 | 4. 巻 120(1) |
| 2. 論文標題 いま、マルクスを読む意味 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 経済学雑誌 | 6. 最初と最後の頁 37-53 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 Baku Momoki |
| 2. 発表標題 "Post-Truth and Populism: From the perspective of Arendt and Hochschild " |
| 3. 学会等名 The 2023 ICCTP Conference |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 百木 漠 |
| 2. 発表標題 始まりのための嘘：アーレント「政治における嘘」論再考 |
| 3. 学会等名 第28回政治思想学会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|------------------------------|
| 1. 発表者名 百木漠・戸谷洋志 |
| 2. 発表標題 「アーレントとヨナスの思想的交錯」 |
| 3. 学会等名 社会思想史学会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Baku Momoki |
| 2. 発表標題 "Hannah Arendt's Thought of Labor and Totalitarianism" |
| 3. 学会等名 International Conference : Ecological Friendly Welfare States and Civil Society in Asian Countries : Based on Interdisciplinary Studies |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計10件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 小野寺拓也・田野大輔・香月恵里・百木漠・三浦隆宏・矢野久美子（著） | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 大月書店 | 5. 総ページ数 208 |
| 3. 書名 悪の凡庸さ を問い直す | |

| | |
|-----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 ケン・クリムスティーン（著） / 百木漠（訳） | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 みすず書房 | 5. 総ページ数 248 |
| 3. 書名 ハンナ・アーレント、三つの逃亡 | |

| | |
|------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 百木 漠 (著) | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 青土社 | 5. 総ページ数 262 |
| 3. 書名 嘘と政治：ポスト真実とアーレントの思想 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 西條辰義・宮田晃碩・松葉類 (編) / 西條辰義・宮田晃碩・松葉類・百木漠ほか著 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 勁草書房 | 5. 総ページ数 336 |
| 3. 書名 フューチャー・デザインと哲学：世代を超えた対話 | |

| | |
|---------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 清原悠 (編) / 清原悠・百木漠ほか (著) | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 共和国 | 5. 総ページ数 440 |
| 3. 書名 レイシズムを考える | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 百木 漠 ・ 戸谷洋志 (著) | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 慶應義塾大学出版会 | 5. 総ページ数 368 |
| 3. 書名 『漂泊のアーレント 戦場のヨナス：ふたりの二〇世紀 ふたつの旅路』 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 野口雅弘・山本圭・高山裕二（編）／野口雅弘・山本圭・高山裕二・百木漠ほか（著） | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 216 |
| 3. 書名 『よくわかる政治思想』 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 マーティン・ジェイ、日暮雅夫（編著）／チャールズ・プリュシック、ナンシー・フレイザー、ウェン ディ・ブラウン、ピーター・E・ゴードン、マックス・ペンスキー、ロバート・カウフマン（著）／青柳 雅文、市井吉興、小森(井上)達郎、藤本ヨシタカ、百木漠（訳） | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 晃洋書房 | 5. 総ページ数 246 |
| 3. 書名 『アメリカ批判理論：新自由主義への応答』 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 日本アーレント研究会・三浦隆宏・木村史人・渡名喜庸哲・百木漠（編著） | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 法政大学出版局 | 5. 総ページ数 430 |
| 3. 書名 『アーレント読本』 | |

| | |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 大阪哲学学校（編）／田畑稔・百木漠ほか（著） | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 新泉社 | 5. 総ページ数 344 |
| 3. 書名 生きる場からの哲学入門 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

『社会思想史学会』第47号（2023年発行）に、橋爪大輝『アレントの哲学：複数の人間の生』の書評を寄稿した（215-218頁）。本書の評価を通じて、アレントの活動論を再考する手がかりとした。

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|